



破聲

貳卷四

大清宣統元年十一月十一日



月神母元年夏の赤津川  
目神母元年夏の赤津川  
神尾村の赤津川  
送山

五舟の内

村尾誌

蕃薇之南の家

明治三十三年五月十日

目要四卷二載破

虹	文士と社會的眼光	文學士諸	水	夏十句	津谷至青
「戀愛」物語	前田翠溪	可愛さかり(繪畫)	短歌互評	神戶サ、ナミ會	岩田古保
區役所	四千兒	もらひぶろ	讀人讀	玉嶋案山子	加藤一楓
蜆賣子	須田きよ子	讀々錄	空蟬吟社詠句	破葉等	破葉等
眞清水	細越夏村	會	告	破葉等	破葉等
筆蹟	與謝野鐵幹	本誌に對する批評	寄贈新刊紹介	伊上凡骨	原田印刷所
は思	菱川淡水	影	刷	成	功
親しき四疊半	中嶋綠也	版	刷	堂	
蛇の目傘	池本奇森	寫	刷		
庭上吟	玉嶋案山子	眞	刷		
夏日吟	法學士小原蒼弓	版	刷		



聲

破

四卷貳

虹

夕の空にうるはしく  
七つの色をこさませて  
光る望の虹の橋  
厭かずうれしき眺かな  
しばしはれては復曇り  
曇りてまたも一しぐれ  
雨風さそふ雲間より  
笑むが如くに稻妻を  
閃めかしにし今日の日も  
名残の空に露帯びて  
虹の七色ゆらくと  
かゝる見るこそ嬉しけれ

渚 水

(サウザイ)

## 文士と社會的眼光

舟あり水あり、以て進む可く走る可しと雖とも、楫子の能く之を御するなくんは奈何、岸を衝き岩に碎けて遂には船体水を漏すなからん耶、文士に於ける社會的眼光奚そ夫れ克く之にライクネスせる。

吾人は舟の楫子に於けるより以上、文士に社會的眼光の必要を認むるもの也、舟や之を傷くるも、只其船体單獨の損害に過ぎずと雖とも、文士に於ける社會的眼光の缺乏よりして生ずる弊害は、單に文士其人のみに止らずして、一般社會は之が爲めに誤り、之が爲に迷ふ、然りと雖ども社會に新智識を興ふるは文士也、青年をして奮起せしむるも文士也、文士、文士が社會より箇人より信望を囑せらるゝ已に斯の如く、社會は彼の高論を俟ち、箇人は彼の卓説に信服す、責や重く任や大なりと謂つ可く、文士なるもの豈輕々に筆を執る可けんや、畢竟するに社會の生命は、渠等の筆に由て保たるゝ也、故に一朝其の筆にして、偏倚せん乎、社會に

隔絶せん乎、彼等を信望せる社會乃至箇人は、爲めに其正中を誤り、非を是とするなからん。

試に見よ、社會の大部分は盲從者也、自己の定見を把持せざる小兒なり徒に聲を大にし、輕々に信憑雷同す、爲めに民間の弊害汚毒は、此間に胚胎す、曰く厭世、曰く失正括、曰く退嬰、曰く敗徳、曰く思想野卑、曰く懦弱と、一々枚擧に違あらざる也。

而して現今に於て、人は總ての文士に社會的眼光の必要を叫はす、只新聞記者にのみは其須要なるを認め居るが如し、故に新聞記者には比較的斯の眼識に肥へたるの士多を占め、克く社會の先見と、新智識とに注目して、箇人、社會を指導し、稍々其責に戻らんとすと雖とも其以外に於ては未たし、強て之を求むれば小説家也、なれと今の所謂小説家は、戀の小説家、情の小説家多くして畢竟社會一部分の小説家たるに過ぎず、從て眼底には社會の一部あるのみにして、未た全部あらざる也、其他の文士と稱するものに於ては皆無也零也、爲めに其歌ふ處、言ふ處、多くは社

會の趨勢に背戻して害あるとも益する處少なし、之皆文士が社會的眼識の缺乏に基因せる弊害なり、豈嘆せざる可けんや。詮すれば文士をして、爾く弊害を生せしむる、其原因多々ある可しと雖ども、一言以て之を約せば、文士と社會の隔絶に外ならず、換言すれば文士と社會の交情は殆んどテッスせるに因る也、以後の文士なるものは宜しく社會に新近して、表裏克く穿ち、趨勢を先攪するの明なかる可からず、其の己れ以外の社會を目して、俗社會とし、文筆以外の實習を俗習と呼び、之に従事するものを俗人と云ふが如きは、頗る誤れるの甚たしきものにして、世に果して俗人、俗習なるものありや、若しありとせば、文士も俗人也、文筆も俗習なるに非すや、彼等の筆は鋏の如く、其文は野菜の如し、耕し賣り以て口を糊す、即ち一の御商賣に外ならざる也。

(4)

然るを強て、一般の社會と隔絶し、一般の人を蔑視して、其大任重責を盡さんとす、克はざる亦怪しむを要せざる也。

### 「戀愛」物語

前田翠溪

昔老いたる詩人ありけり。こはいと良き人なりけり。ある夜、家に籠りけるが、そとは、劇しき暴風吹き狂ひて、雨さへはげしかりけり。彼は温爐に脊を飾しつゝ、いと樂しうて有りけり。

今しも火は心地よげに燃えつ。その前には林檎數多弄めさあへり。「かゝる夜、野にあるけもの、哀れや、一本の乾きたる毛だに持たざる可きに。」優しき彼なればかくは獨ごちけり。

折しも門の方にて「喃、この門開けては玉はらずや、吾は今濡れにぬれて、からだも凍えん計りなるを。」と小供の叫ぶ聲す。小供は泣きて門を叩くなりけり。

雨は、いや降りまさりて瀧を切落すがごとく、風は雨戸をいたくも、打ち躁がせつ。

「哀れなる者よ」老詩人は立ちて戸口に行きて見るに、一人の子供、全く

(5)

の裸体にて、布巾一つ身に附けて、長さ亞麻の様なる縮髪ちぢれげよりは、水玉のぼとくと垂るがまゝにて立てり。彼は寒さにうち震へり。思ふに老詩人の家に入れさらましかば、彼は忽ちに息絶えたらましを。「あはれなる者」と再び呼びて、彼は小供の手をばとりて、此方こなたに来て、温らせてむ程に。かくて味よき葡萄酒、林檎なども得さすべし。汝そなたはいと善き小兒こなれば。」と云ひけり。

さて此子供と云ふは、兩の眼はさながら二つの星の輝くに似て美しく、雨は頭より滴るものから、尙髪は巻き縮みていたいけな例へむに者なし。云は、天の童わらわべとも云ふ可くや。寒さに色は復かへらねど。戦棘まのいさはあとなく止みつ。

彼は手に一張の派手やかなる弓を持てるが、全く雨に毀されて、飾れる矢の色さへに濕氣のために塗沫ぬまされたり。

老いたる詩人は温爐の傍に坐を占めて、彼をば膝に抱きて頭なる水を絞りやりつゝ、自ら手をかざしてうま酒温めて吞ませけり。今はかの子供

元氣もとの如くになりて、再び血は頬に漲りげれば、或は床を飛び走り或は翁の回りを跳ね踊りなどしけり。老詩人「そなたは心樂しき好き兒と見ゆるが、名をば何とや云ふ。」と問へば、小供答へて、「我名は「戀愛」となむ云ひ侍る君は我名を知らでや御座せし。そこなる一張、吾はみんごとえこそ射侍れ。さて見ませ、空模様もいつしかはれ渡りて月さへに輝きぬ」といふ。老詩人「そはとまれ、そなたの弓は毀はれたらすや。」小供は手にとりて、こゝそと檢べ見つゝ、「そはたゞ君が愛憐の御言葉のみ、弓は既に乾きて、損じたる所もなし。弦もそのまゝにて有るを。いかてためしても見ばや」と云ひてしかと引き絞つて矢を番へて、狙ひをば定むるよと見る間に、あはれ親切なる老詩人の心臓をば射貫きてけり。「思ひ知りしか。わが弓の破弓やれのゆみならぬことを」渠は斯く云ひて笑ひて逃れ走れり。

いかに憎き童なるよ。已を温き室に助け入れ、飽迄已に親切にして、剩さへ、うましき酒と味よき林檎とを已に得させし、かくも優しきこの老

詩人を傷付けんとは。

彼はいま偽ならぬ傷負ひにければ坐に轉びて打ち泣きつ、「噫憎みても余りあるはかの「戀愛」なるよ、とくにこの事吾子どもに話さけて、戒め訓じ、以來斷じて彼の憎き奴と交はらしむまじ。再びわが覆轍を踏まざらむ様に」と叫びにけり。

「かくて渠の子なる男、女、父の恐しき話をきくにければ、かの「戀愛」をばこよなう愧れ謹みけり。

されど「戀愛」はいとく狡猾なる性なりければ、折にふれ時に乗じて、巧に彼等を瞞着せんと企てたり。

彼はある時、早くも彼の子等が學校より歸るを見て、急ぎてその側に走りゆきつ。もとより黒き服着けて、腋には本包をさへに抱きたれば、彼等はその假扮なることに心も付かず、ひたすらに、同じ仲間の學生とのみ思ひて、互に腕をかはしけり。

得たりと「戀愛」は喜びて又彼等の胸深く矢をば走らせてけり。折しも娘

等の祈禱終へて、會堂を出づるに會ひければ、そが中に紛れ入らむと思

ひ定めつ。彼はかく人の後に隠るゝを常とはするなり。

彼が、一度、劇場の大なる燭臺の上に登る時は、誰も眞の燈火と見あやまる計りに、花やかに燃ゆるなり。

彼は又公園に公道に至らぬ所とてはなし。

あゝ人々と彼は曾て御身等が父母の心臓を射貫きたるものぞや。試に問ひても見ませ、さすれば御身は、父母の宣ふ所をさゝ給ひぬべし。あはれ彼は憎き小供、名も一つの「戀愛」なるべきよ。

御身は必ず何事をも彼とは共にし玉ふな、彼「戀愛」は絶えず吾々を窺ひて有るべければ。思ふても見ませ、こはいと古きことなれど、彼れは御身の祖母君にさへ矢を放ちたるべきぞ。其傷今こそは癒えたれ。いかで祖母君はそを忘れ玉ふべき。あはれく恐しきはかの戀愛なるよ。

さても今は御身が上にかゝれるに、かへすくもかれの恐るべき子たることは忘れ玉ひそ。(アンデルセン)

## 區 役 所

四 千 兒

窓口から寄留届を出して何と云はれるかと薄氣味悪く思ひ思ひ自分は待つて居た。

「この人に父はないのですか。」

一種の苦味を帯びた聲で眼鏡の上からこちらを覗くやうにしていふたのは届書を請取つた男であつた、普通の書記面をした柄の髪を長くのばして居る。

「さうです。」

稍冷笑の語氣で「父のない人がある——といひながら彼の同僚で左側に並んで居る書記の方へ顔をむけて届書をも回した。くだらないことをいふにも程がある。向ふ側の男が隣の窓口へやつて来て「前戸主の名を書いて出せ」といつたのでそのやうにして又最初の窓口から出した。

七十餘りの老人が僕のそばに來た。素より立派な身なりでもない。目も

うとさうで、見るから氣の毒に思はれる。

寄留のお係りは

といひさして指すので、僕は軽くうなづいて少し身体をそらして老人に席を與へた。

ブクブクとして居る處で見ると中風でもあらうか。足踏もあやしい。この地に寄留して居るものには違ひないが、何を届けるのかとヂツト見ると退去届といふのを出した。出して老人はこのやうな言葉を添へた。日本橋の方へこの春から參つて居りましたので、ハイこんど家内に不幸が御座りまして御届を致しまするに、こちらを立ち退きましたことを御届せねばならんといはれまして……

何といふ従順な云ひ振りであらう、届出の後れたことを更らに頻りと謝罪つて居る。この老人は自分等あつての書記とは思はないで、お役人様お役人様と思つて居るのであらう。

本籍は



と窓口の髪の毛の長い書記が恰も叱りつけるかのやうに例の苦味な聲で問ふた。

「へい 神奈川縣横濱市戸部町三千二百五十八番地で御座ります  
おづく老人が答へた、その語がすむやすまないに、屈書を老人の手に返して頗る傲憚な顔で老人の顔、僕の顔、と見廻してツンとしてる  
何處か間違つて居りますか、この前の代書に頼みましたので御座りますか」

代書に頼みましたとは老人にとつては非常な味方に思つてゐるのである、登記をする時などは代書の文字でなければ同じことがよし書いてあつても通らぬ、代書の文字はまづくともこゝでは誰れの文字よりも勢力があるので、老人の信頼も無理ならぬことなのである。

「違つてる、見れば解るてないか、」

「違つてるやうに御座りませぬが、どこで御座りますか、すこし目が悪るう御座いますもので……」

「本籍の處を」

老人は神奈川縣横濱市戸部町三千二百五十八番地と微かに讀んだ

「違つてるだらう」

「違つてますか」

「違つてないといふなら教へるが、これは何だ、これは」

番地の處を筆でつゝいた、うるさいといはぬばかりの仕振りである。

「これが三千二百五十八とお前さんには讀めるか知らぬが、私は目が悪いのかさうは見えぬお前さんの目は餘程いゝ目だ。」

千の字が脱けてゐるのだ、それしきのことを、かうまでいふとは如何にも職務に忠實な書記である。

老人は何處何處までも從順で頻りに粗漏を佗びて、これを請取つて、確かならぬ足を門前の代書所までうつさうとしたので、僕は見かねて千の字を入れてると、書記は僕を呼ぶ、何とした意地悪い奴ぞと些怒を帯びて返辭をした、その時に子供をおぶつて十四五の汚ならしい男の子が這

入ッて来て、

ほうそをうゑてもらはうのはどちら

と聞いたので、書記は

巖の札を買う處だ、

と教へた、その間に認印を出さし今挿入した文字の處へ押して老人に渡し、何をいふとて呼んだのかと思つて、そちらへむきなほると海といふ字にかゝつてゐるは何といふ字かと聞かれたので僕は答へる辭に窮した、隣に居た書記が、

「それは君をれていゝのだよ、海といふ雑誌といふ意味になるのだらう」

「いゝか

と髪の毛の長い意地悪の書記は念をおしておいて

ぢやよろしい

といつたので外に出やうとして帽子を手にするとたんに、その手すりに苦役所とかいてある字が目についた。

## 蜆 賣 子

須田きよ子

蜆かちさりむきみ貝

涙ながらに呼びあるく

しむみ賣子のどこへゆく

年は九ツ可愛さかり

ぬのこまとはで單衣

それさへ穴と垢だらけ

足袋もはかなきやすはだしに

破れしわらじふみしめて

こゝろし手には籠さげて

吹き來る風をさけながら

雪の細道たどくと

蜆賣子のどこへゆく。

眞清水

細越夏村

今の手にはほしきはちさき眞白花世にやはすねし世をやは超えし  
 深き井は思慮なき子に白からず練らば釣瓶に甘き眞清水  
 とやかくの思索に鍵は恵まれず靈に觸れてはふとあく扉  
 たまくにあきし扉のいと狭う悟りの道に二人許さぬ  
 とこしへのうるはしき身とよみがへる曉近き背に地の咀あり  
 望みあれば今日も血潮のめぐりぬるうつらくの五尺越す肉

ほんの井 小こを 扱き 岩とこしと  
 妙と女 十とせし 天み 三つ 鏡幹

たとふれば碎けし牡丹なほ艶に愁ひて長き日にわび薫る  
さげしみのもだし歎美<sup>たうひ</sup>て怠慢<sup>おこたり</sup>は耻をねたみのひとやにこむる  
春老いな野ぞ暖き紅ゐの花は甘露の流を溶かむ  
みがゝざる白き小石は地によけれ錦敷きては床飾らめや  
愧あれば皆な嘲りの針と突くかの笑みまこと罪を吐けりや  
響もつ眞しろ小石と凝りもせな董敷く身の日に溶けんこゝ  
毒はあらぬ荒れたるまゝの胸に伸びて時折り顔にもるゝ醜<sup>と</sup>の穂

黙 思

菱川 淡水

風清き若葉の後庭のかた隅、咽びてやまざる玉泉のほとりより、我れ  
二枝の花薔薇を手折りさぬ。

紅薄き花の色の餘りに愛らしければとて、そが一枝をばさる若き人の  
許へ贈りつ。

さて残る一枝はわれこれを机上の白瓶に挿みて、此世ならぬその色香  
に、獨り絶えがたき思ひを寄せぬ。

久しく都なる風物に反きて、夏草生ずる柴の戸に、一卷の「ハイネ」の集  
をせめてもの友といつくしみし我れは、茲に新たなる一人の友を増し得  
て、まづうれしさに其夜は夢さへ結びかねき。

紅冠緑衣の花の風姿の高尙さよ、彼れ園生に在りては綽約の躰能くあ  
たりの萬縁を威壓して、譬へば薄墨の地に星の墜らたらむが如く、また  
六尺の破窓に在りては金文字の洋書の裡より優艶なるそが半身を照

て、宛然正装せる女王の玉座に就けるに似たり。我が心いかで動かさら  
むや。

さればこの女王が命はまこと短かきものなりき。僅か二夜にして花は  
空しく萎れ果てぬ。我が志の花に至らざるによるか、花の愛のわれに及  
ばざるが爲めか、一夜を哀れなる夢に泣きつくしての翌朝、紅褪せし幾  
個の花片はあはれ机上の塵と散りにき。

梢を渡る初夏の風を身にあびて、其の日我れは黙思に日の暮れたるを  
知らざりき。日既に暮れてあたりは物の薄暗さに、われは猶も欄に寄り  
て獨り黙思をつとけぬ。盡させぬ思ひになやみ果て、わが身は今や痛く  
疲れつ。されど散りにし花はわれを扶け起さんともせざりき。

ア、我が花は散りぬ。げに我が机上の花は萎れぬ。かくて我は惱まし  
き思ひに心地死ぬべう覺ゆるを、同じ根より分たれたる今一枝の花は奈  
何に散りぬとも、咲きぬとも、うれしとも、將た悲しとも、彼の若き人  
よ覚えてそを我に告げ給はざりき。

告げ給はざるは人になさけの薄ければか、花一時の榮はげに果敢か  
りしかど、贈りし我れの眞情は大海のそこひも知らず深きものを、  
心なの人や、なにとてかくは冷かになり給ひし。  
思へばまことあだなる願ひなりし。狂風殘紅を拂ひつくして人の音  
は永劫に來らず、寂たる夏の永き日を我は再びかの詩聖と共に残りぬ  
あはれ星影淡き破窓の夜なく、「默思」はわれを驅つて何處へ去らん  
すらむ。

(さる君へまゐらすとて五月中の一日)

は ち

黒

髪

(20)

朝はほのくまだ草蔭に  
暗の小波影うごめくに  
蜂よなぜ飛ぶあげはの蝶の  
妹背ちぎつた董の花に  
音を偷んでつと寄り添つて

甘いキツスを竊まう爲か  
但し添寢の夢見る爲か

見ても御覽じ御前の口にや  
針があらうを「御前の羽にや  
刺かあらうを」可愛や花に  
キツス爲うなら唇破れて  
添寢爲うなら膚か裂けよう  
例令其花散らぬにしても  
蝶のなげさを何するつもり

○  
若き子のこれも宿世のさちなれば貝多羅葉の蔭ふかゝれな  
そゝ寒く籠に老ひたる鶯の夢うかゞひてしのびよる宵

(奇蹟)  
(夜露)

(21)

## 親しき四疊半

綠也生

硝子戸を押つける様に繁つてゐる若葉、それはまるで緑紗のやう、絶えず窓を通して射込んでくる太陽は、青葉に反射して、この我が四疊半の室へ涼しい光線を送つてゐる。

楽しい朝の日光を浴びて、今この室へ据つてゐる自分は奇しいものでも探すやうに四邊を見廻し、ふと遙に幼時の事を回想し始めた。毎朝々々寢床の中から體を半分疊の上へ這出し、窓越しにくるこの朝の日光を浴び、お目醒の菓子を貰つて喰へたのもこの室、毎夜々々昔噺を寢物語に聞きつつ、幾度か鎮守の森に鳴く梟の聲に却されながら眠についたのもこの室。偶の暑中休暇で歸省して居る自分には何となく親しい様な氣持がして、平常この室に這入ると今更の様に昔が思ひ出される。親しい昔を操返して居た自分は、物音に驚され夢からでも醒めたかの様に立上り窓をば開け外の方へ首を出し、或昔馴染のものでも求めやう

して、四方を眺めた、やはり故山の自然は數年前と少しも變らない。秩父の山山は今しがた山鳩の二三羽立つた森の邊りに雄然と緑の衣を据長に着て、空高く聳え其中腹に白い雲がかゝつてゐる、深谷川の支流は展望のいゝ畠地の中を割つて、至極平和な音を立てつ流れて居るぢやないか。あゝ自然は昔のまゝだ！ 自分は唯大きくなつた許り！  
こんな事を考へると、親しい様な、又妙な氣もする。この時唐紙は開いて表れたのは親しい母の半身、それは自分の名を呼ぶのであつた。盛んになりかけて空想は全くこゝに破れて、自分は室の中へ首を引込めると同時に目に這込つたものは、幼時壁に畫いて叱られた事のある落書の人形の首であつた。

夜

露

百合に似て清き我戀<sup>ぬが</sup>ぞ垂る  
自百合にそと打かけぬ夜の衣  
百合の露昨夜星落ちて宿りけん

蛇の目傘

池本 奇 璣

白薔薇の花ふさはすと歌の子のかくれていにぬこの世この秋  
この秋を夕の水に泣かれぬる白き野ばらの花しかるれば

(この二首故中西やす子の君を憶ひて)

墓のべに生ふるすみれをなつかしみ摘みてかへりぬ春の夕ぐれ  
夕靄に道まどひたる興の子の小笠にかゝる紅梅の花  
山國の人の送りし白堊けさの小雨に花ひとつさく  
山寺の谷深うしてあれ庭に寂しく咲きぬ山茶花のはな  
いつの世かわれも小き笛とりて人の小琴の歌に合さむ

(桂はな子の君に)

春風よ君のみ聲をうちのせて尙たかゝれと祈るわが歌

(名古屋の只聽兄に)

麥 畠 なか の 細路紫の深張さしてゆくは誰が子ぞ

火のなかの今はの時やいかなりしわれも術なし血の筆つきぬ

(鳥島噴火の報に接してよめる)

あつかりし鄙の長路よ川そへの茶屋の葭簀に柳なびけり  
蛇の目傘われは干さなむ青柳の庵面の小雨今やはれけり

庭上吟

玉島 案 山子

緑葉の露の葉がくり太腹に波うたせつゝ鳴く蛙かも  
庭草の露のうてなに雨祈ると蛙の臣は歌うたふなり  
露の葉の風をよろしみ太腹の蛙の臣はうまねせずかも  
あづさ弓揖保川上に薪船の白帆かすかず木がくりに見ゆ  
廿日草咲きて散りてゆ五百千葉の緑いや濃く夏さびにけり  
築山の石滑らかに苔むして庭の木立も神さびにけり  
梅の花散りてゆ早も幾日経ぬるか青なる實のこゝた結びぬ



夏日吟

蒼弓子

名ところぞ折ふし奥の田植唄  
夏瘦に賤しからさる女かな  
兵五万大河をわたる時鳥  
有明の蘭燈暗し時鳥  
あを田風柴の庵を吹き透す  
何もなき海原廣し青嵐、  
清風十五文也ところん  
雲の峯いろくに崩れてしまひけり  
蝙蝠や徳利さげたる青女房  
いたづらに明け易かりし怨哉

夏十句

津谷至青

山更に幽になりけり閑子鳥  
眞菰刈る手元や汐のひさくと  
炎天や人の絶えたる橋の上  
三尺の庭に蟬啼く眞晝哉  
夕立の包んで暗らき小里かな  
若楓小晝明るう覆ひけり  
大寺の高き鐘樓や夏木立  
よし切に急雨の注ぐ芦間哉  
水鶏啼く夜雨降るなり小柴垣  
簀掃除竹の子堀て戻りけり

## 短歌互評

中山鼻庵、一色夕月、栗岡水舟、前田翠溪、  
田畑水舟、赤堀花陰、眞下飛泉、時任直章、  
園田愛緑、中野紫硯、水谷破琴、玉島案山子、  
前川正美、時松柳眉、井上任浪、伴琴舟、  
岩田古保、磯の上露子、玉野花子、きく子、

吾ながらさとりかねたり大聲に男の子何とて泣くをはむかる(夕雨作)

然り泣くべき時には大に泣くべし決して女々しかるべからず人道の爲め社會の爲に大に泣くべし、歌亦佳(水舟)かれりけ露骨の調を免かれず、えられずなどのやうありたし、よき歌也(鼻庵)水舟君に同じ(古保)鼻兄に賛す(水聲)蓋し一氣呵成の作と思はれる、まことなくやりつばなしの跡が見へる、併し想は斬新で面白い(花陰)大男、漢の本領(紫硯)こゝろゆきたるみ歌(露子)かねたりはよろし露骨とは云ふべからず(直章)如斯抽象的の作品は果して看るもの、詩興を惹起し得べきや疑はし(正美)必ずしも新らしき作に非ず(愛緑)半は水兄に半は鼻兄に賛す(柳眉)骨をりく、此男もし泣かば蠶豆程の涙を出さむ、骨太き歌(夕月)

絃たちて譜は焼きはて、けふよりは友のねむりの園にゆきなん(華城作)

添書ほしき歌、尤も添書を要するものには割に佳作なきものなり(鼻庵)けふよりははいかに、なんもよからず(古保)二君に同ず(翠溪)あるは某子が故秋遊君の爲めに作られたものではあるまいか。われはたゞに優しき情趣のみを取らんかな(花陰)やりつばなしのやうだ、もう少し苦しんでほしい(紫硯)このうた上の句と下の句と別口の様の感ありて調和せず(水聲)

而して自殺する時のうたの如し如何(水聲二)一方よりいへば不健全なる歌也、宛も水聲の言の如く自殺する時のうたの如し、取らず(水舟)絃を斷つなどのうちには沈痛なる響るを要す、之れにはなし、吹壳をばたくが如く鼻紙を裂くやうにやられては堪まつたものならず、下の句も殆んど始末に了へぬやうに思ふ(夕月)

別れてはひとりかへすにあまり若さかの子今ごろ時雨にあはむ(鼻庵作)

わかきは弱きと何れぞ僕は後者の難なきが如きをとる、隱約の裡に無限の情趣を認め得たり(水舟)わかきの方よし、「君はいまこまがたあたり郭公」の句に一等は下るべし(翠溪)とにかくよきうた也(翠溪二)ひとりかへすにあまりわかきの現在に突然かの子、いま頃時雨にあはむの過去の句を以て「夕張の山を今日かこゆらむ」的に想像せしめるのはちと無理ではあるまいか、假りに第三句をわか、りしといふ様にしたならば下句との調和がよき様に思ふ、然し決して平凡の作ではない、幽邃なる風趣、風韻は誰が眼底にも映するのである(花陰)私もさう存じまして(つゆ子)私もさう存候(直章)優しき作に等し(水聲)いまごろとは俗ならずや、然れども哀情切々(愛緑)いまごろ決して俗ならず、俗とけ穴勝用語に非ずして寧ろその想にいふべきもの、此句何等の俗念を惹起せず、心地のすがすがしきを覺ゆ(水舟)下の句再讀三讀妙(夕月)

八東穂の垂穂の稻の秋のみより妻子やすけし何かなげかん(夕雨作)

上句の調何となくおもしろしと思ひぬ(水舟)誦して胸しづかなるを覺ゆ、よく作られたり(梟庵)案山子と見たり(翠溪)其調や優緩、情や溫柔、の音五を重ねて尙耳障りなきと、ろ已に巧緻也(花陰)上句まことによろし、さいへ下句との調和を危む(水聲)上一句はいかにも流暢で心ゆく斗りであるが下三句が調をなさない殊に五句はだれて居る(案山子)よき歌也但し五句は贅ならずや(夕月)

笛の役に召されてすゝむ階に月あかくして櫻花ちる(柳眉作)

寧ろ純を觀にすべきか(水舟)笛の役は風情なり(梟庵)佳作(古保)佳作とは思はず下の句まことにしまりなく幼稚なりむしろ凡々の作(翠溪)下句は「月影おぼろ櫻みだる」と改めてはごうてあらふ。詠史的の作として佳作と見受ける(花陰)月かけおぼろではよくないかへつて原句のまよよしと思ふ(紫硯)心にくきばかりと(露子)(直章)佳作の部に入るべきものか、月あかくしてをあかうしてとせば、いづれ(水聲)秋の本ちるとした方がよかるべきに(愛縁)

秋くれてかくて別れの村はづれ行く子水田にかけ寒いかな(花陰作)

其情うつして妙、佳作(古保)凡なる材なれど修辭にたけたる人の作らし(翠溪)寒いかなのみは稍作り過ぎし様思はれ候はずやげに修辭にたけたる人の作らし(飛泉)げにうれしきみ作とこそ(露子)水田感心せず(直章)多感うれしき詩とのみ(水聲)「水」の音耳ざわり(愛縁)然り「凡なる材なれど」(夕月)實際暮秋の水田ありや否(夕月二)

茶の花のあかるき庭のおもひ如何に寺初冬の興多からむ(紫硯作)

下句をとる(水舟)下句も亦取らず(水聲)茶の花と寺俳味とはいへ多趣なり今少し入念の勞を煩す(梟庵)梟庵に賛(古保)然り俳諧的趣味のある作である、唯知らず、如何に茶の花咲きたればとて庭のあかるきといふ事や、あまりに仰山ではあるまいか、白髪三千丈といふが如き一の誇張と見ても首肯し得られない、又茶の花ののでは茶の花が物主格になつて面白くない、寧ろのはにとありたい處である、尙諸氏の高教をまつ(花陰)但し寺初冬の景、茶の花との調和を得て頗る妙(花陰二)佳作(直章)上句抽象に失せずや(きく)可作とはいひ難し(水聲)花陰君のの字はさう云ふんぢやありますまい、あかるきは明らかに俳句より來るもの可、不可は斷難し、下の句はぶつづけたやうの感、(夕月)三句何となく云ひ足らざるの感あり(水舟)

夕雲の行方眺むる眼のつかれ魂はいづこに雲流れ去る(潮衣作)

まだ云ひ足らず(水舟)然り(夕月)雲二へ、かゝる同字は忌むべし、眼のつかれは没趣味なり(梟庵)賛(翠溪)然り(破琴)駄(古保)修辭の洗條を俟つもの也(花陰)眠のつかれ面白し他は凡(霧峰)(水聲)一、二句及四句露骨、苦澁(正美)

雪の朝しら梅さよろれよこれよこは詩なり秋津嶋根の(琴舟作)

三句は不自然なり、又下句は意義を現はさざるものといふべし(梟庵)否々(作者)第五句餘韻

薄弱也、要するに失敗の作(花陰)想も新らしからず修辭も今一きはと覺えたり『ふは詩なり』は詩の領なるの意味なるべけんも少し無理也(飛泉)宛かも夢物語の如し(直章)上句と下句連絡なり、離れ離れなり、それふれよ面白からずこれよとありてこいよと受けるのはチトぎこちなきやう、『こいよは詩なり』と就ては飛泉君に賛成不成功(水聲)『それよこれよ』とはごまかし句である不必要である僅か三十一文字の中に一句の埋、艸を用ゆるとは不用意も甚だし、下二句解するを得ず(案山子)

人も老いよ木の葉も落ちよ草も枯れよわが世の秋を吹けよ暴風(柳眉作)

下句の推敲を煩はす、かくては上句一、二、三の末字「よ」を「む」と改めたくもなる(梟庵)此歌くだけたり(翠溪)五句の「よ」は除くおそまされ(花陰)一、二、三句の「む」説賛成(花陰二)五句力足らず(飛泉)上句は前者のたまふ如く、五句の「よ」の字無き方つよからずや(花子)内容悪し(直章)「吹けよ吹け」とやつたらごうでしやう、暴風は何と讀ます積にや、あらしならば嵐とかけばよきさうなもの(きく)何となく暴風の如きうたと見たり(狂浪)五句再考(案山子)然り再考を要す、靜かなれ作者「限りあれば吹かれど花はちるものを」靜かならずや君よ(夕月)單に五句といはず思ひ切つて下句を改められよ(破琴)直章の評は無理也(琴舟)暴風の方は小學の生徒も知れるに(作者)面白きうたと思ひぬ梟庵、花子、に賛(水舟)

もらひぶる

玉島案山子

今七時が鳴つた、

両手を懐につきこんで、首をすばめ、意氣地なく寒そら、ちよつと手拭の端を肩にはをり、ふらりと自分は、福山さんどこえ入湯に行くべく家を出て、と西の空に目をやると、今がた日は黒崎山の彼方へ、龍門寺の鐘の響と落ちて、名残の夕榮が、オレンジ、紫、蠟と次第に消て、世は夕暮の寂しきとばりにつゝまれ、揖保川堤の千本松には、白い靄が棚引で、其梢のあたり、中島山の上に出た、今日舊曆四日の片割れ月が朧ろなるべき春の夜に、さても冴えに冴えて、秋の月のよう、勿論昨日と云い、今日と云い、若草摘むべき野に霜白く、手水鉢には薄いながらも氷を見る程の殘寒、かて、加えて、朝から止みなしの風に吹きとうされての爲でもあろうが、見るから身にしてみても、しめつばい夜風が、冷たく首筋に吹きこんだので、思はずそつと身振して、すたすたとさみ足に歩



み出した、

向ひの家の裏戸口の障子には、ぼつと灯影がさして、そこ、のおとなりは、がたひしと戸をくりだした、ちっくくと、姿は見えぬが浮れ鳥がどこからか、どこえやら鳴き來り鳴き去つた、

「おしまい」

中の方に、火鉢を擁して煙草をくゆらして居つた、此の家の亭主福山のおぢさん、急に口から煙管をはなして斜に構へ、少ししやがんで脊を、こう猫脊にまるめて眼鏡越しにしろと見廻し……灯が古代風の燈心二筋の行燈なので、外から這入つて來た者は、薄暗がりによくは見えぬ、それにおぢさん近頃眼を病でいらつしやるから……やつと僕を見當て、

「へえおいでな」

と三里さがつてからの挨拶

「今晚はよう湯が出来まして、どうぞ一ぱい……」

「さあ〜 まあ上へあがりな」

「ありがとう……哲ちゃんうまくやつてこられたかね」

「ハ、ハ、案の定落第……なにしろ九十名許可の處え、志願者が五百名からもあらうと云ふのやで、おつ、かへん、學校ではすいたやつを撰りどりや、なんぼ志願者があると、かまわんようなものやが、小學校で一二を競ふ位ずぬけて居れば知らぬこと、わいとこのなんかのそいで、あかんのはあたりまね、やが元氣丈はえらいぜ、明日又、龍野の方えいて受けるて、力きんで居る……ヘーンこれやてどうせだめなは見ねてる」

「しかし試験は、そう一概にも云へんて、富圖を引く様なもので、運とひようしてひよつくら、かからむにも限らんで」

「ヘーン」

そんな事がと、如何にもさげしんだ笑をして、將に火の消えんとする煙草を邪見にすつてば、んとはたき、右手の指尖で、くるくると巧に回せつゝ、左手に新聞引き寄せて節、おかしう讀みだした。

「相撲はどうです……」

昨日の雨で休み、今日多分やつたろう、梅と常陸とやが、どちらが勝つやろか、面白かろな、常陸も強いが、梅の元氣も中々やて、手も細かし、どちらとも軍扇をさしかねる、君ならどっちえいく？」

「どつちツて、どうも……」

「豫言出来へんやろ、力がいるで此の一番が」

折柄風呂があいたと知らせてきた。

「いつてきないつてきな」

とおぢさん矢張火鉢を抱き込み、猫脊のまま、ひよい／＼あごを突き出しての挨拶には實恐れ入つた。

「それぢやおさささ」

湯殿はこゝから四五間向ふの、納屋の傍らにあるので、着物を脱いで真裸身、外えついと出ると、寒い冷い風に總身の毛逆立ち、續けさまに二三遍身振をした。

五衛門風呂の極窮屈な、六尺近い自分などは、十分あがきも出来ぬ中でばしや／＼と鳥の行水、頭から足まで、ざつと湯にかゝるや否早々飛び上つて、でも

「ア、御蔭でよくぬくもつた」

とは吾ながら よくも言つた、

「此頃の續き物は面白いぜ、明日はどうなるやろか」

おぢさん中々話すきで、後へ／＼材料を持ち出して、ハ、ソと相槌をうとふものなら、何時迄もはなさず、今日計ぢやない、何時でも、こゝえくると長尻するのが吾れ人共に例なので、今夜もついか／＼と、歸るのを忘れて居つたが、ふと思ひ出した南から(親類)そうぢや招かれたのだ。

家には母只一人、人待ち顔

「なんだね今頃迄、南から何遍使がきたものか、お父さんはとくに行かれたのに早う行きな」

そこを歸るや否や頭から小言のたらく、早速引き返して南へ行くと

「こりやく、よう御越し、待つて居ました……さあずつと坐敷の方へ」

とこれは又意外のもてかた、元來の下戸がさゝるゝまゝに、續けさまのぐひ飲み、酒は上物腹はハングリときて居るでたまらない、頭の頂遍から、足のさきまで、びりゝつと、まわるはまわるは、天上が動く、洋燈が踊り出す、もう坐にもたまらなく、家に歸つて横になる否や……眼さめて聞九時計がこれも七時、其の夜のある朝であつた（明治廿五年四月稿）

破聲に關する書信及び寄贈新書、雜誌、新聞等は

凡て破聲會内岩田古保宛に御發送願上候

### 讀人讀

加藤 一楓

一楓拙文？ 每號六號活字を以て五六頁を埋む、下手の横好き、古保兄の迷惑をも承知て又候避病院へ行かざる範圍内に於て下らぬ事に秃筆を  
此頃の事で事實、寫實も寫實で、多少讀者の御参考ともならんかと存じ言文一致、否金釘流を並べる事とした

余の友人某物語に去る五月十七日の夜明治座の傍なる〇〇と云ふ待合へしかも、風俗擾亂の目的で出馬した例なれば三味線實は枕なる「シンガー」を御召集になるのであるが、此日は財政の都合で所謂高等淫賣先生を招いた所が、其所に出現まませし玉体は年は二八かなどと云ふ、一切の資格を有し先づ十人並の容貌未だ場なれざるか、頗る恥らうて伏し勝なのである、之れ花に例ふれば牡丹に非ず櫻にも非ずもとより菊には非ずふれ菜の花の日照に會ふたる如し……  
……此點々間は既に薄暗き室と變じ、刑法第四百廿五條第十號の規定「密に賣淫を爲し又は媒介したる者は云々」と云ふ恐ろしい犯罪に取掛る場所なのである、所が彼女は此室の表に屈し容易に入るの氣色がない、余は其〇と變名して無理に此室に引き入るとすると彼女は、さめくと泣き出したので、余は且怒り且驚き其理由を尋ねるに、餘儀なくされて居るのである、彼女は其實問に對し漸くにして答ふる所は意外、又意外此に一つの小説の種となり得べき程の答をしたのである、彼女は神田區猿樂町一丁目十四番地に住するも、家素より豊かな



られて手内職に家計を助けつゝありしが行儀見習の爲めとして奉公に出てんと、媒介者たる雇入口入業下谷區練堀町なる藤屋に行きて其が周旋を依頼す主人(藤屋)曰く目下素人屋の奉公口一軒もなし然れども堅き待合の口あり行かざるにやと進められ諾の返事と共に行く、待合數軒をあせれど何れも曖昧なる家、一日も勤まらずして破談となる、かくて數日を費した、藤屋にても如何もさう我儘ばかり言ふては困るの下に苦情百出なので、では一時如何な家へでも住込みますと答へた、折能く此所に濱町の平野(素人家)と云へる家にて女中入用とのこと、得たりと同道して此家に行きぬ、其所は濱町二丁目十〇番地にして細き路次をつきあたる小さな家、行けば男氣なしの女主人にて十五六才の女子と二人のみ、桂庵と女主人と何か相談の上壹圓を受取て桂庵は歸る、何もなす事なくして日が暮れた、すると小意氣な女中入り來りて耳語すると十五六の女は化粧をなし衣服を更めなどして出て行く、程なく來る例の小意氣な女中。歸るに及び後に残れる女主人と彼女。女主人は曰ふ定めし御承知でもあるうが此の商賣は樂なもの、一度行けば八拾錢になり、待合へ三十錢此家へ廿五錢お前が廿五錢と分けるのであるから客さへ澤山あれば儲かるものさ。だから勉強してお遣りなさい、此れから明治座傍の〇〇へ行くのだから衣服を着換へてとセツ下りなる縮緬羽織と絹衣を出す、彼女は驚きて私はそう云ふ積りで參つたのはありませんから御暇を頂戴いたしませうと云ふと、夫れなら先つき桂庵に二圓渡したから、夫れを返して歸れとか、すつたもんだと争つた結果、其衣服を着換へさせらる、女主人に警固されて待合へ行く有様で遠々此の始末であると泣き物語一節を聞く、流石の

某も大に赤面して、よし、夫れなれば氣の毒だ、此れから同道して談しを付けて遣ると云へば彼女は非常に喜びて何分宜敷く御願ひ申しますと、同道して其主人たる家に行かんとする途上にて彼女は女主人が向ふより來るを告ぐ、某は少し後れ勝ちに歩を進めば、女主人は彼女が歸宅の遅きを案じて迎ひに來たのであると。程なく其家に行く、某も表に立つて様子を伺ふれば、あの御連れの人に用があるから是非今夜は歸宅させて下さいと云へば女主人は直ちに諾して程なく出て來る、某曰くそれなら桂庵料を渡して來れと金を與へて女主人に渡させたるに女主人は桂庵料は未だ拂つてないから受取らないと云ふて出て來る、某は不思議に思ひながら彼女を日本橋迄送り、以後此の如き謀計に係らざる様に諭し若干の車代を渡して別れた。其後數日を経て女主人と彼女が萬世橋を渡るのを某が車上で認めたと云ふたが此の後如何したことであるか某の深切が果して彼女を泥中から救ひ上げ得た結果が公然に發表することが出来る終局か。

○劇界の不振を唱ふる者多くして實行するに難き今日に引換へ、早稻田、學習院、華族女學校、外國語學校、などで「セヤアター」的なことを演じたのは多少局部の人の目を引いたのであるが、衆人に感動的實行したのは先づ川上演劇江戸場明渡し位なものだろ、然し彼は維新の時代物である、此に自認劇通連の微力を以て他人の厄介になる範圍内に於て此の十月を期して摸範的演劇を演ずべく其狂言撰擇に取掛る、勿論自認劇通連は早稻田、慶應大學の學生である、毎土曜日に集會して稽古に熱心せり、前に紅葉露伴を問はず、あらゆる文士の作物を讀んで研究する

に教育且模範的として恥かしからざるものは田村松魚氏作三湖樓を除去して他になし、故に之を當時有名なる狂言作者に依頼し脚本とした實にふれふ、其眞止の劇所謂正劇と稱へて無比難ならん。

熟練の上は府下著名なる劇場を借受け都下の俳優をして顔色なからしめんと思ふ熱心何か岩石をも……此發起人たる者は耕雨、桂月、穿波、銀玉、一楓、此外四名なり。次號に此脚本の筋書を古保君の承諾を得て本誌に上梓する。

○面黒くもない話であるが神田橋の傍に府立第四中學校分校と云ふは高等女學校の變身で、此看板が三時を報するや忽ち女子教員講習所と替ると同時に海老茶式部が散々五々列を亂して入り来る、その姫の御顔を見上げ奉ると何れとして一人並の容貌の御方は無いのである余考ふに彼等は生涯女教師を以て終るべき覺悟なのであるかと……其胸中を開けば教員講習所に入るは非常なる入學試験を要するので、第一として自分は到底人の良たる容姿なきと、其結果として鏡に向ひ深思熟慮熟考、數日に亘り且キレノ水は勿論購ひ得べき化粧品を用ふるも効なく結果、初めて入學して教員となる資格を得んとするのである、勿論此試験こそ各國に行はれざる我國特有胸中隨時入學試験と云ふ。

○那珂博士の甥藤村操氏が華嚴之瀑布に投じ泡と成て碎けし悲惨は既に世人が腦膜に深く浸潤せる處嗚呼感動の動物多少の血あり涙ある人間に如何に想像を盡させたるや其事情を管々しく細き立つるは氷を嚙んで水を飲むが如し然れども氏が巖頭の遺書を紹介して所感を述べざる可らざるに至る

ざるに至る

### 巖頭之感

悠々たる哉天壤遼々たる哉古今五尺の小軀を以て此大をはからむとす、ホレーショの哲學竟に何等のオリーソリチーを價するものぞ萬有の眞相は唯だ一言にして悉す、曰く「不可解」我この恨を懷いて煩悶終に死を決するに至る既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし、始めて知る大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを

氏が此の興に至りたる理由は既に遺書に依て……然し原因の極端なる厭世家たるとは（曰く「不可解」に依て了せられて居る、終りの句に於ける「始めて知る大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを」に於ては、

余をして一言を挿む能はざらしむ、厭世家の或る苦悶に會ひ、然も其華嚴の詩否悲的なる、見上ぐれば中禪寺湖より落つス數十丈、見下ろせば地下に雷雨を聞くが如く茫然たる中に霧即ち瀑布の前面を纏ふて五裡霧中只岩燕の飛行するを見るのみ、魂飛びて其居る所を知らざらしむる、絶景又絶景なる此所を知る者にして然も厭世家加ふるに「不可解」なる恨に煩悶せし者は實に此に辿りて身を瀑布の下に置き岩石の間を頭髮一本彼方此方に流るゝ下流魂魄既に樂天國に遊ばせんと思ふも宜哉實に藤村操氏が云へる大なる悲觀は大なる樂觀に一知せるを。

## 殷々録

破

鐘

▼夏已に半す、幾多の希望を以て迎へられたる癸卯の文壇は、今や前半期を送らんとす、されど何等か吾人の希望を充したる作物ありしか、散文壇、何等の傑作ありしか、韻文壇、何等の雄篇ありしか、評論壇、亦何等の卓論ありしか、吾人は一二新進作家の作ありし外、些も蓄と相異なるを見ず、否寧ろ昨の賑盛に比して、今は衰靡の姿あるを見る、あゝ眠れる文壇また残れる後半期に於て何等を爲し得るものぞ、

▼此間一道の光明とも見るべきは、新脚本の製作なるべし、鷗外漁史の『雨浦嶋』、水陸子の『オセロ』以來漁史を始め、劇作に筆を染むる作家漸く多く、劇に於てもこれを場の上せたるものあるに至れり、聞く月郊子が『江戸城明渡』を明治座に演ぜし時、子は自ら上京して是れに盡す處ありしと、ふれ有りてこそ始めて斯界の進歩をも見るを得るなれ、夫れ劇の進歩は、良作家と、良俳優と、兩者相待たざる可からざるは言を待たずと雖も、亦以て觀客の思想の如何に相關す、已に作家の理想を發揮せる新作を場の上せ得たり、また一般觀客の思想の高まりしを知るに足らむ、往時場の上せ能はざりし逍遙博士の『牧の方』の如きも、今日にありては至難の事にあらざるべきか、

▼花房柳外子なりと覺ゆ、嘗て讀賣紙上に、演藝界の大家に對し、政府をして相當の尊敬を拂はしむべしとの説に、宙外子の賛せしとて、是れを拒斥せし事ありき、子の説は要するに、藝術の

尊重すべき事を自覺せざる者に對して、態々尊敬を與ふるには及ばずと云ふにあり、されど吾人を以て之れを見れば猶ほ甚だ不感服なるものあり、子の説によれば藝術の價値を識らざる藝術家の藝術は眞の藝術の價値を存せざるが如し、されど藝術は或点迄は確に天才によりて來るものなれば、藝術家其人が價値を識ると否とによりて價値の定まるものにはあらざるべし、彼の昔の名家の如き、眞に此價値を自覺せしもの果して、幾何かあらむ、

▼子はまた彼等の品性を論じて、油畫十詩十演說なりと曰へり、されど彼等の品性を而く劣等ならしめしもの、抑も誰の罪ぞ、多く言ふを要せず、芝居なる語、河原乞食なる言、今猶ほ世人の口を離れざるにあらずや、子の曰ふ如く彼等は實に小兒なり、白刃を與ふるは危険極りなし、されど彼の櫻井驛の一刀は、能く北朝の心膽を寒からしめしにあらずや、已に小兒なり、能く與へて能く戒めされば、如何でか能く大なる成人を期する事を得んや、唯夫れ與へやうなり、戒めやうなり、吾人は或る何等かの方法を以て、幾何かの尊敬を彼等に拂はんとするものなり、斯の如くしてこそ始めて斯道の奨勵ともなり、又革新をも見るなれ、然らざれば何れの時に、子の所謂新時代の要求を充すべき品性の高き藝術家を出さんや、

▼過日美術新報『美術小言』に、小説を讀み音楽を聽きて落涙するものあり、繪畫と彫刻とは人を泣かしむる事なしとの一節を見たり、然り、詩歌は活動的にして、繪畫彫刻は靜止的なり、彼は Time にして此は Space なり、而かも音楽に至つては天地自然の聲音の Harmony なり、其感動に差ある、蓋し論なきなり、されど亦程度なり、古來往々名畫彫刻の活動せし傳説あ

り、若し夫れ悲哀なる絶代の名畫彫刻あらば、必らずや人をして泣かしむる、難きにあらざるべし、

▼天溪子近刊の太陽に、我國幼稚なる美術家を迎ひて、發達せる文學家を顧みざるを慨す、されど吾人は子の説の甚だ偏頗なるものなるを云はずんばならず、抑も我國美術家を遇するに至りし、年尙ほ淺く、近々五七年來の事なり、されど唯或一部のみにして、未だ一般國民が眞に其趣味を解せるにはあらざるなり、是れを文學に比しては、或は増るものあらん、然れども若し是れを彼の泰西諸國の上流社會が、競ふて美術家を保護するに比しては如何、到底同日の論にあらざるなり、吾人は子の曰ふ如きは、却て幼稚なる我美術、益々退歩せしむるなきかを憂ふるなり、

▼元來文學美術なるものは、貴族富豪の能くすべき業なり、夫れ大なる作を成すには、大なる準備を要す、然るに我國現今の文學家、美術家を見るに概し赤貧洗ふが如くにして、或は歳暮催鬼に責められ、或は妻子の病苦に責られ、止むなく自身も不感服の作物迄、公にせざる可からざるに至るもの往々之れ有り、是れを彼の泰西の文學家、美術家の或は田園に閑居し、或は古跡を訪ひ、故事を究し、一畫一作能く數年將た數十年の永きを費して成すに比しては如何、嘆ずべきの限ならずや、吾人は文學のみと曰はず、美術をも益々厚遇して、保護せん事を我上流社會に切望するものなり、

▲學生年に増加して、學制益々嚴なり、可及的完備せる専門家を作るは教育の方針なり、されど

是れが爲め天下幾萬の無籍なる學生を作るは、決して教育の目的にあらざるなり、専門學校令出づ、吾人は其余りに無謀ならざるかを疑はざるを得ず、茲に此令を實行せる三四年後の結果に就きて考へよ、必らずや一大恐慌を來すべきものあるべきなり、例へば或る特殊の技藝に關する學校の如きは是れなり、斯の如き學校に入學せんとする者、亦多くは技藝家の子弟なるべし、我國技藝家の子弟にして指定中學を卒業したる者果して幾何かある、吾人は當局者が速かに此省令を復舊せん事を希望す、敢て吾人の臆説に非ず、是れ天下の輿論也、

▼藤村生の死圖らずも我が文壇の問題となり、所説各紙上に見はる、稱ふる者、難する者、責むる者、憐むる者、戒むる者、論ずる處皆まち／＼なり、中に最も吾人の意を得たるは「昨日曜の讀賣紙に所載せる孤島子の『センチメンタリズム』なりき、子はレスリー、ステープンの説を引きて其美と弊とを論じ、透谷、古白、樗牛三子の死と言とを述べて最後に曰く、嗚呼彼等の死は、我が文壇の發展に對し、如何に貴き價なるぞや、(中略) 彼等は潜める一代の感情を代表して、叫びぬ、而して逝きぬ、誰か天の命を知らん、然かも若し此くの如きを以て彼等の使命なりとせば、寧ろ是れ光榮ある使命にあらざるや、若し夫れ近時藤村某の如きに至つては、また等しく此思潮に漂へるもの、世は返す／＼も夫の痼疾の恐るべきを唱ふと雖も、我は寧ろ茲に潜める生命の閃きを認めんと欲す、惱みあるものは幸なる哉、世は惱みある者によつて生きん云々、▼嗚呼口に人生を論じて藤村生の死を憐み、後進の青年を戒めんとする諸子よ、諸子は嘗つて人生に就きて藤村生の如く多く考へたりしか、況んや生を難じ生を責むる諸子をや、(六月十六日)

空蟬吟社 (門司)

庭前の奥まで見ゆる夏坐敷  
臺所まで見ゆる通る夏坐敷  
別荘や海原見ゆる夏坐敷  
青疊青き簾や夏坐敷  
富士下す松風涼し夏坐敷  
夏坐敷蓮の薫る夕かな  
聚雨一過鎮守の森に蟬の聲  
與太郎の缺の中に蟬の聲  
行水や古き榎に蟬の聲  
海水を帽子の儘で遊さけり  
夏帽子瀧の茶店に忘れけり

靜水 龜鶴 古月 同 同 古月 同 同 古月 同 同 破葉

會告

- 来る九月一日は「破聲」特別刊行として「破笛」の一卷を諸兄の机邊に捧げ申すべく候特に本號は紙數を倍々加し文壇著名の士に乞ひ趣味津々たる金玉の文字を満載し知名丹青家の彩筆になる清新優美の畫幅數葉を納め聊か立秋の文壇を飾るべく候(本號は定價十五錢)
- 本紙前號は平木白星、山本露葉、結城素明外五六氏の諸先輩、諸兄より御懇切なる高評を玉はりたり茲に記して深く鳴謝たてまつり候
- 栗岡水舟、角蛇外二三氏より寄稿ありしも編輯の都合にて止むなく次號に譲り申候
- 本誌出版費補助として左の三氏より金圓の高贈を辱ふせり御厚情感謝たてまつり候  
金六十錢 山田松琴(播磨) 金一圓 山上しづ子(京都) 金五十錢  
紫苑生(東京)
- 次號の原稿は八月十五日に確と締切申候
- 破聲三號は賣切申候

●劇界不振の此頃正劇派と稱へ川上音次郎外京阪有数の男女新俳優が「オセロ」劇を演じ活氣を加えてより漸く文學の作物が歓迎し初められたると共に彼處此處と場所を撰ばず「不如歸」「江戸城明渡し」「金色夜叉」「聖人か盜賊か」「椿姫」など内外諸名家の傑作小説を脚色し場に上ほする事非常に盛且は見物の上にも多少の成功致し居候は斯界の爲め甚だ賀すべきに候もかくては従前の三尺者相手と違ひ聊か思想の高き觀客が多數を占め居候然るに俳優其者の程度如何んを問へば相變らぬ男娼、幫間、博徒輩にて少しも舊と變りし處なき様に候さすれば是も唯だ一時の人氣に投ぜしを幸とし一つの流行熱かとも思はれ候萬一かゝる事にて折角發揮せられし者も何の好果を得ず反つて笑草となり水泡と消え止むとは實に悲しき極に候らはずや新派俳優たるもの大に考慮なすべき事に候是等彼等を歡じ數年間暗に斯界に心酔し日夜研磨に余念なかりし會友一楓加藤氏を始め早稻田、慶應大學、生諸氏が有名なる脚色家某氏の手にて依て脚色されし松魚田村氏の「三湖樓」を來るべき秋、都下一、二の劇場に於て教育模範的劇とし演ぜらるゝ由吾人は壯なる舉を祝すると共に活目一番如何に劇界振起の興奮劑たるかを待ちはぶるに候

●募集俳句披露は又々次號に譲り申候

### 本誌に對する批評

新◎小◎說◎  
經◎濟◎時◎報◎

新緑の下、卷を繙くの價值あるべし、良雜誌。

青年畫家古保岩田氏の主宰に係る文學美術雜誌にして萬丈の氣焔と嶄新の記事とは其長とする所世の往々博士學士の肩書に由て虛名虚利を得んとするものゝ如きと同日の比に非ず青年諸氏の必讀す可きもの也。

本號(二卷三)の裝釘は歐米の珍本を參酌し白衣子の考案になつたものゝ由なるほど風がはりな雜誌である先文學雜誌の上乗たるものであらう云々

三號より製本を泰西式に改め記事も精撰せり

裝釘を歐米の珍本に參酌して改めたりて本號(二卷三)は誠に美しき雜誌とはなれり強いて所屬を求むれば明星派に近きものならんか、和歌俳句と範圍を限らず廣き意味の文學を鼓吹するものゝ如し

ほ◎た◎て◎が◎ひ◎

と◎く◎さ◎  
帝◎都◎書◎籍◎新◎報◎

# 寄贈新刊紹介

● 獨 絃 哀 歌 蒲原有明著 山下幽香繪

詩星有明蒲原氏が曾て「太陽」「明星」其他二三の雑誌に載せたるものを、ここに改削を加へ近作の「靈鳥の歌」とを併せて刻せられし新體詩集なり。氏が最近の詩作に就て如何に考慮を費されたるかは、其一班を窺いたるべし。その詩形の韻度超然たる意匠と詞采の鮮媚、高雅幽麗たる氣格と日つは幽香氏が得意の妙腕を揮るは、無聲の詩趣津々たる挿繪と合せて實に近來稀れに見るべきものなり。(定價參拾錢、神田區佐久間町四丁目白鳩社發行)

● 該 撒 殺 害 附抱一庵氏トウエー論 山縣五十雄譯註

英文學研究第六冊として出たるもの當時英米文壇に一位を占め名聲赫々たるマークトウエー氏の原文を五十雄氏が特彩の麗腕に依つて註釋譯文せられしものなれど其四分の三は氏と抱一庵氏とのトウエー論を以て埋められたり、吾人はいづれか優劣の判別に苦しめども、五十雄氏の論舌は最も眞面目にして極めて豪放自若たるも抱一庵氏が論議や間々戲笑、怒罵、輕薄の語多きが如し。(定價貳十錢、神田區南甲賀町八、内外出版協會發行)

● 芭蕉翁花屋日記 牧野望東 星野麥人校訂

故正岡子規先生の一奇書、一珍書と云はれた芭蕉終焉日記である、一卷をヒ下に分ち上げ翁が病床の容体と忠實なる、去來の面容と、下は逝去後に就ての去來と松尾半左衛門との往復書簡である、其如何に悲傷、悲愁の極なる知らず枕下にははるが如き感にうたれ思はず溢る、涙に袖をしばりぬ。是れ實に世界の一大奇書斯道者は勿論恐らく書を手にする人は必ず一讀、再讀、三讀すべきものなり。(定價十五錢、牛込區水道町廿六、晚鐘發行)

● う ひ 冠 卷 之 六

凝屋紅葉氏の余流をくぐる鷗洲森氏が主宰なる可愛ゆき長方形の色刷俳誌、口繪コロタイプ版にて病障の十千萬堂と其筆蹟(何はさて命大事の春寒)の一句を掲ぐ、子規遺稿う冠十二月あり、挿繪は鏘木清方氏筆。(價錢壹貫文、深川區熊井町十五竹馬會本部)

● 卯 杖 第 五 號

望東氏の地理的俳諧、冷鐵子の舊派俳家の僻眼などあり例に依て記事豊富。(定價十二錢、神田區仲猿樂町一、秋聲會出版部)

● 帝都書籍新報 第五、六號

本誌の特色たる新刊書批評は愈々詳密にして益々眞面目なり、活東比の九十九谷、疎山氏の俳句など見るべし。(定價三錢、日本橋區吳服町廿三、帝都社)

● 經濟時報 第二十三號

(定價六錢、府下豊多摩郡大久保村三廿〇、同社發行所)

● 圖書月報 第壹卷第十號

その部類をとはず普く新刊圖書を詳密に紹介せられたり。(定價五錢、日本橋區本材木町二、東京書籍商組合事務所)

●軍人遺族新報 第四號

大日本陸海兵士の遺族及び現役兵の家族にして貧困なる者の状況など掲げたるもの。(定價二錢、京橋區築地三十六、軍人遺族救護義會)

●とくさ 第四號

木賊會の機關俳誌、大倉耕濤氏の口繪「菖蒲」奉書刷を以て先づその頭を飾り、猿蓑講義、幽山近藤氏の小石川の初夏などを美しの衣とし、句相撲にてその足を勇々しうしたり。(定價十錢、小石川區水道端町一、廿一、木賊會本部)

●卯 杖 第六號

小波氏の寫生紀行雨の青梅は卷中の白眉。(定價發行所前同斷)

●經濟時報 第廿四號

東京 經濟時報發行所

●新文 海 第一卷五號

漂浪氏の△○錄(噫々偉人擲牛)玉摧け蘭折るゝの嘆、思はず涕泣袂を反す嗚呼無情なる哉天道は夫れ夢なるのみ。(定價五錢、兵庫縣加西郡北條町八七、交文會)

●壽々夢 詞 第三年六號

長方形の美麗なるハイカラ雜誌、内容の富聲冷々として絃の如く、綠陰幽草に聞くすゝむしの數節颯々たる清風の涼、仙境に入るの感あり、あゝ美し鈴なる聲百千年までも冷々しうあらんこそ望みなり。(定價七錢、名古屋京町四八、壽々夢詞會)

●新青 年 第一號

青年詞藻の改題せしもの内容と体裁とを大に改む、編中近藤雲外氏の「自然と人生」を佳とす、

評論、小説、美文、雜筆、新体詩、和歌、俳句、漢詩等却々に賑はしけれど誦すべきものもなし、何處となく稚氣の満々たる故に大人向きのせざる様にも思はる、吾人は其勇しき外出を祝すると共に猶一層材料撰擇を嚴重にして后日大成せられんの日を待つものなり。(定價九錢、石川縣鹿島郡徳田村字飯川、同會)

●俳 星 第四卷三號

卷頭露月氏の俳諧小槌見るべく其他撲夫鵬子の雜まつり記、烏人子の俳諧茶屋、虚明氏の市井人事等いづれも俳味に富む、餅の鬻鬻子の俳諧職人畫中二三をあげば「鼠骨チヤリネの口上役と化け、紅綠パン屋を始め、碧時々稻荷下げをやり、鳴雪翁桑入に惚れられ」なども面白き哉、一讀噴飯再誦膾炙。(定價七錢、秋田縣山本郡能代港島町廿三、俳星社)

●寶 船 第三卷七號

能代の俳星と相對して地方雜誌(俳諧)の牛耳をとれるもの青々松瀬氏が主宰なり、烏人子芳野小記、虚明子保津川下は洒落三昧なる俳的の筆、青々氏がホト、ギスの蕪村の句解釋に就ての一文は「戸をあけて蚊屋に蓮の主人哉」を論じ、終に同氏の峰屯集春五十句を載せたり。(定價八錢、大阪南區大寶寺町東町五二、同發行所)

●ほたてがひ 第二卷三號

瑞穂叢誌の改題せし俳諧雜誌、敬竹氏の俳道の革新を論ず、指頭庵の木乃伊句と高襟句、碧玲龍氏の蝸牛堂偶語など見るべきものか。(定價九錢、石川縣石川郡粟崎七十六、帆立會)

●雨 蛙 第十號

さして出色の文字を見認めず、舊派に近き俳誌なり。(定價六錢、愛知縣額田郡岡崎字籠田九、桂死會)



◎近畿評論 第五十三號

京都に於ける政友會の機關雜誌、時事片議、同人公論、史壇、纂錄、百花園、巨言、風塵集の諸門に分たれたる中、百花園は新体詩、和歌、俳句などを以て飾らる就中和歌壇最も誦すべきもの多く飛泉眞下氏が獨特の光彩を放つての野の花、神戸連會諸氏の詠艸、不羨雅會詠艸等いづれも嶄新の想と清麗幽雅なる調を以て歌はれたり。(定價九錢、京都市河原町荒神口下ル、同編輯所)

◎天 使 第七卷五號

(定價四錢、名古屋玉屋町卅五、二葉會)

◎新文 海 第一卷六號

稍體裁を調ひそめぬ、表紙題字は小波氏なり、葛之助子の自覺せよは好文字多く水舟氏の怒言一則是桂月張の筆。(前同斷)

◎南冥文 卷 第一卷六號

(價五錢、臺南市鞋街臺南義塾)

◎俳 星 第四卷四號

◎ほたてがひ 第二卷四號

◎愛 嬌 第七號

つまらぬもの永存の價値なし。(周防呼阪公共印刷合資會社)

◎正法 輪 第七十二、三、四、五、號

京都 同發行所

秋田 俳星社

石川 帆立貝社

懸賞吟詠募集

(投稿切八月十五日限)

長詩……題……隨意

短詩……題……隨意

俳句……題……隨意(秋季)

一應募せんと欲する者は郵便端書一枚につき和歌二首俳句三句限り其課題と共に住所姓名等楷書にて認むべし

但し長詩は半紙又は罫紙に限る(四種郵便)

一玉吟は凡て各専門諸家の精駁なる撰擇を乞ひ九月一日發行の破聲に掲載す

一投稿は凡て東京破聲會編輯局宛

賞品 一等三人 圖書 代價貳圓  
二等三人 圖書 代價七十錢  
三等六人 圖書 代價三十錢

投稿略規

- 一記事政治に渉るもの及風俗を壞亂する虞あるものは没書とす
- 一原稿の字數は一行廿字詰用紙は半紙大に限らるべし
- 一未完の原稿は採用せず字体亂雜のもの亦然り
- 一誌上の匿名は差問なしと雖原稿には毎編住所氏名を記載すべし會員は必ず氏名の傍に會員と添記せらるべし
- 一原稿は各自句讀を施さるべし
- 一原稿の採否は記者の自由とす
- 一原稿の返付一切請求に應せず

### 俳人諸君必讀

交通の便千里一瞬にして達し得べしと雖も其業其職に依ては家か放て遠く全國の俳人と接眉談笑し難し此時や弊社視る所あり全幾百現俳人省像録を編纂せんとす其要とする萬の俳人の爲めに

所は居乍らにして東京の新舊派名家は勿論尙も全國各地俳諧を以て名ある俳家の美麗鮮明な寫真版有像の躍如とし其面前に輝かしるにあり又印刷製本の如きも四六二倍の大形にして表紙に古今名家の眞蹟を寫真にて巧に配合したる者として内容は約一千人の省像を門派甲乙を避けてイロハ順に編入し其裏面には住所姓名雅號略歴及俳句一首を印刷するの故に未だ慕へざり見ざる名家に接し得る而已ならず最も優美温雅な俳家名鑑たるの便もあり、幸弊社は今回寫真銅版製版所をも社内に設備したれば着々製版を急ぎ編輯は服部耕雨、杉浦宇貫の両老練俳家の助を得て瀬川疎山、中へ自巳の省像掲載希望者は左の規定にて至急申込まれる爲めし虚榮心に走る少壯家の同視にあらずして明治俳人の爲め莫大なる便を興ふると同時に俳交の媒介たるに背かざるべきを信ず。

### ▲申込規定

- 一 申込者は最近の寫真一枚に生國住所姓名雅號生年月日及び隨意俳句五首を添ふべし
- 一 寫真掲載料は要せず、但寫真銅版製版料金五拾錢を要す
- 一 寫真と同時に送金せざれば製版せず
- 一 製本出来迄には其正價を廣告すべしと雖も假に一部金壹圓と定む
- 一 寫真掲載申込者には正價の二割引にて豫約す、但豫約金一部に付金五十錢を要す
- 一 掲載申込締切本年七月十五日限りとする
- 右は在りふれたる無責任の出版物に非ず速に締切に後れざるやう申込みあるべし

**申込所** 東京市日本橋區本銀町壹丁目七番

**帝都社**

月刊俳諧雜誌

# ほがたほ

四卷四號既刊  
定價郵稅共金八錢五厘  
石川縣石川郡粟崎村字粟六七

**帆船立貝發行所**

每二回月 發行 五、廿日

**經濟時報**

政事經濟之羅針●鐸木之文學實業

定價一部六錢

第廿四號既刊

○東京府豊多摩郡保久村西保久三廿

**經濟時報社**



美專雜

明聖

畫月文

術門誌

入刊學

見よ卯年第七號掲載要目

梨園閉話(評論)高安月郊  
 夢うつつ(短詩)山川とみ子  
 ◎麗落月夜鴉(喜劇)森嶋峰  
 ◎沙翁劇「夏の夜の夢」扮  
 譯(寫眞)◎蛇影(短詩)相馬  
 御風◎春の朝(譯文)エミ  
 ユ、ゾラ作吉田茨洲譯◎傑  
 扇(短詩)前田翠溪等◎傑  
 ?(翻譯小説)エミ、ユ  
 ラ作森しづか譯◎夏祭(長  
 詩)蒲原有明◎書牘一則(長  
 島梁川◎夏ごろも(短詩)協  
 坂さち子◎舞樂觀覽記(雜  
 文)大谷繞石◎幻影(長詩)  
 前田林外◎嗚呼高山博士  
 (雜文及長詩)在醫科大學伊  
 達李俊等◎郊外(小説)山本  
 露葉◎立見日記(戯文)磯津  
 水◎畫界消息(評論)石井柏  
 亭涼榻茶話(談話)花房柳野  
 幹◎開書(評論)花房柳野  
 帝國文學の天壇合評新詩社  
 花房柳野の短詩合評新詩社  
 同人◎小觀(評論及報道)紫  
 紅、鶴鳴◎夏ばな(短詩)逢  
 坂藍水等◎比叡山の僧に贈  
 る(長詩)岩野泡鳴

(錢壹稅郵錢拾貳金價定)

東京府下豐多摩郡澁谷村字中澁谷  
 東京新詩社

畫月文 美術專門誌

入刊學



見よ卯年第七號掲載要目

梨園閑話(評論)高安月郊  
 夢うつつ(短詩)山川とみ子  
 ◎飄落月夜鴉(喜劇)森峰  
 ◎沙翁劇(夏の夜の夢)馬  
 譯(寫真)◎蛇影(短詩)相  
 御風◎春の朝(譯文)エミ  
 ユ、ヅラ作吉田漢洲譯◎傑  
 扇(短詩)前田翠溪等◎傑  
 ？(翻譯小說)エミ、ユ、  
 ？(翻譯小說)エミ、ユ、  
 詩)蒲原有明◎書牘一則  
 島梁川◎夏ごろも(短詩)維  
 坂さち子◎舞樂觀覽記(雜  
 文)大谷繞石◎幻影(長詩)  
 前田林外◎嗚呼高山博士  
 (雜文及長詩)在醫科大學伊  
 達李俊等◎郊外(小說)山本  
 露葉◎立見日記(戯文)磯  
 水◎畫界消息(評論)石井  
 亭涼榻茶話(談話)與謝野  
 幹◎開書(評論)花房柳外◎  
 帝國文學の天壇合評新詩社  
 花房柳外◎短詩合評新詩社  
 同人◎小觀(評論及報道)紫  
 紅◎鷓鴣◎夏ばな(短詩)逢  
 坂藍水等◎比叡山の僧に贈  
 る(長詩)岩野泡鳴

(定價金貳拾錢郵稅壹錢)

東京府下豐多摩郡澁谷村中字澁谷  
 東京新詩社

破聲

定價 壹冊 七錢  
 郵稅 二錢  
 六冊 四十二錢  
 郵稅 六錢  
 十二冊 七十五錢  
 郵稅 十二錢

廣告 十一錢  
 行 錢  
 壹半  
 圓  
 壹圓七十錢

本誌代及廣告料は一切前金△領收證は發送せず  
 紺誌の到達を領收の證とす△前金盡くれ  
 ば封皮に朱印を捺す△郵券代用紙絶△廣告用木版は別に料金を申受く  
 明治三十六年六月卅日印刷 明治三十六年七月十日發行



編輯兼發行人 岩木喜市  
 東京市麴町區飯田町四丁目卅一番地 六  
 印刷所 東京市麴町區飯田町四丁目卅一番地 功  
 發行所 東京市麴町區飯田町二丁目三番地 堂  
 東京破聲會

賣捌所

●取次販賣所 東京市神田區表神保町東京堂○神田區裏神保町八番地積文堂○神田區錦町二丁目  
 目強堂○神田區一ツ橋通七番有斐閣○神田區裏神保町八番地積文堂○神田區南神保町  
 二番地松江堂○神田區小川町壹番地文會堂○本郷區元富士町二丁目三十八神戶店○本郷區元富士  
 町盛春堂○牛込區神樂町三丁目六番盛文堂○麴町飯田町二丁目三十八神戶店○神戶市元町  
 五丁目石丸日東館○門司市榮町二丁目飯田書店

神戶市荒田町三丁目七十六番ノ八岩井方  
 門司市仲町六丁目自念方  
 韓國鎮南浦南枝方  
 神九神  
 國州支支  
 部部部

# 破 笛

破聲呱々の聲を揚げてより已に二星霜に、爾來千難万苦を排して誌運漸く盛に、今や確固たる一地步を占めて更に永遠の旅程に向つて長足を試みんとす。是全く挽推に厚き誌友諸兄と博識達見なる先輩諸彦の扶を得たるにより、聊か諸兄が高義に酬るん爲め、來る九月一日を期し先輩諸彦及誌友諸兄が錦心繡腸より湧きと金玉の文字を網羅して「破笛」の一卷を刊行し、以て、立秋の文壇に獻げ、覇を構へ、鼓を宇内に鳴さむと欲す。乞ふらくは其盛装して現はれんの日を俟たれむ事を!!

## 破 聲

隔月一回一日

定價 壹冊七錢 郵稅二錢 六冊四十二錢 郵稅六錢 十二冊七十五錢 郵稅十二錢

廣告 十一錢 發行 壹半圓 頁 壹圓七十錢

本誌代及廣告料は一切前金△領收證は發送せず、雜誌の到達を領收の證とす△前金盡くれ、封皮に朱印を捺す△郵券代用紙絶△廣告用木版は別に料金を申受く

明治三十六年六月卅日印刷 明治三十六年七月十日發行

禁 轉 載

編輯兼發行人 岩木喜市  
 東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地  
 印刷 人 大野喜六  
 東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地  
 印刷 所 成  
 東京市麹町區飯田町二丁目三番地  
 發行 所 東京破聲會

### 賣 捌 所

●取次販賣所 東京市神田區表神保町東京堂○神田區裏神保町上田屋○神田區錦町二丁目助強堂○神田區一ツ橋通七番有斐閣○神田區裏神保町八番地積文堂○神田區南神保町二番地松江堂○神田區小川町壹番地文會堂○本郷區元富士町二番田中店○本郷區元富士町盛春堂○牛込區神樂町三丁目六番盛文堂○麹町飯田町二丁目三十八神戶店○神戶市元町五丁目石丸日東館○門司市榮町二丁目飯田書店

神戶市荒田町三丁目七十六番ノ八岩井方  
 門司市仲町六丁目自念方  
 韓國鎮南浦南枝方  
 神戶支店  
 九州支店  
 韓國支店